

中国語における文法論的文章論

—説明文における文と段落の接続・連鎖—

鄭 高 咏

要 旨

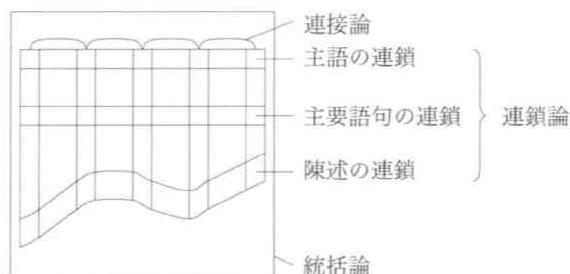
文法論的文章論という学説は、1950年に時枝誠記が打ち出した考え方をもとにして、永野賢が初めて提唱したものである。筆者はその学説から実に大きな感化を受け、ついには中国語における文法論的文章論という新しい学説を打ち立てようと決意するに至った。勿論、日本語は膠着語であるのに対し中国語は孤立語であるため、永野氏の学説をそのまま援用するわけにはいかない。筆者は永野氏の学説を十分に消化した上で、従来の中国語文章論の観点にはない新たな構想を試みた。それは以下の3つの図によって示すことができる。

今回は、文相互の関係が比較的密接である説明文を手始めに、文と段落の接続・連鎖にのめりて論じた。



図①

図② 〈文章分析の手順〉



図③ 〈文章構造解明の構想図〉

キーワード：文法論的文章論，接続（文・段落），接続関係の種類，連鎖（文・段落），節，文章構造解明の構想図

一、中国語の文章論に関する先行研究

1. 文章学発展概要

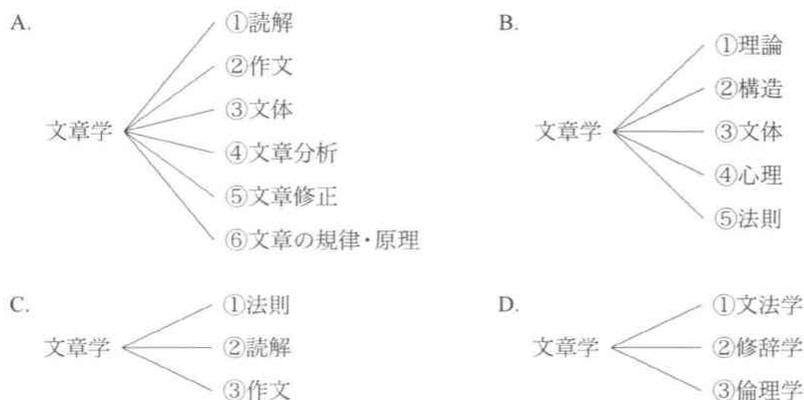
文章論は中国では「文章学」といい、その研究は先秦時代から始まった。『尚書』や『論語』、『墨子』には文章に関する論述が、多数収められている。また中国最古の文章学の名著である『文心雕竜』を著した南朝梁の劉勰は言語の単位を字・句・章・篇とした。そして隋唐の頃、文章学の研究は一層進み、北宋になると儒学者程頤が初めて文章学に言及するに至る。彼はその著書『近思録』で「古之学者一，今之学者三，異端不存焉。一曰文章之学，二曰訓詁之学，三曰儒者之学。」と述べた。また同時期には、文章学の専門書や論文集が数多く出版されている。元・明・清の時代、文章学は飛躍的發展を遂げ、次第に学科の一つとして整い、やがて学業の場にも登場するようになった。この頃の主な著作には、陳繹曾の『文説』、楊有光の『文章指南』、劭作舟の『論文八則』などがある。現代文章学の発展が始まったのは20世紀初頭で、1920年代には劉咸忻が『文学述林・文学正名』において言語の単位を5つに分類し、「一曰字，二曰集字成句，三曰集句成節，四曰集節成章（亦曰段），五曰集章成篇。專講一字者謂之文字学，專講字群，句群者謂之文法学，其講篇章者則為文章学。」と記した。龔自知著『文章学初編』、葉紹均著『作文論』はいずれも1925年、商務印書館より出版され、翌26年には夏丏尊と劉熏宇が共同で『文章作法』を執筆している。その後、33年夏丏尊と葉聖陶の共著『文心』の出版、39年汪馥泉による『文章概論』の刊行、42年蔣祖怡が『文章学纂要』を執筆、43年劉啓瑞著『文章学十講初稿』の出版と続く。1960年代から、文章学は再び日の目を見るようになり、62年4月林祝啟が『文匯報』に『文章学初探』を発表し、文章学は言語学の中で独立した学科として数えられるべきであるとの主張を展開した。林の見解によれば、この学科は「言語の表現法の研究」を主とし、文章学は理論と実際という二つの要素を内包すべきで、理論的要素には文章学史と文章原理（銜接律・側重律・変化律）が、實際的要素には措辞や文章構成・文体が含まれる。文章学が目覚しい發展を遂げたのはそう古いことではなく、1980年代になってからである。1980年8月『語文戦線』に張寿康の「文章学古今談」が発表され、続く10月、同氏は論文「試論文章学研究」（『漢語学習論叢』山東教育出版社 1983年）において、文章学研究の推進を力説、言語研究を章（超句統一体）と篇にまで広げることが提唱した。加えて張寿康は文章には法則があるとし、語言合律・観点材料統一律と層次律の「三律」を提言している。その後、文章学コースを設ける大学が増加し、特に1990年代以降には曾

祥芹の『文章学探索』(中州古籍出版社 1990年)及び『文章学与語文教育』(上海教育出版社 1995年)や、張志公の『漢語辞章学論集』(人民教育出版社 1996年)という代表的な著述が上梓されるに至った。

2. 文章学の研究

(1) 研究範囲

いくつかの学説に分かれており、それぞれの説を次に図示する。



(2) 位置付け

以下のように学説が分かれている。

- A. 文章学は作文学から派生した分枝である。
- D. 文章学は言語学と文学の中間に位置し、言語学とは一線を画する独立した学科である。
- C. 文章学は言語学の一部門である
- D. 「文法学」「修辞学」「倫理学」を総合的に研究する学問が「文章学」である。

(3) 研究の「出発点」

伝統的な文章学研究の出発点は文章における自然段落にある。南北朝の齊・梁時代に刊行された中国初の文章学の大著、『文心雕竜』の「章句・第三十四」で、著者劉勰は言語の単位を字・句・章・篇に分類し、「夫人之立言，因字而生句，積句而成章，積章而成篇。」と記述しているが、この「章」は現在の「段落」、或いは「自然段落」に相当するものである。そして「章」と「篇」を合わせて「篇章学」とし、これこそ「文章学」と考えていたことは、多くの文章学者の見解が一致するところであった。ゆえにこの学問の研究は自然段落より始まったのである。また1960年代以降には張志公の「辞章学」理論の影響を受けて、文章学は文と文の関係に注目し始め、その上、文法学者の提言した「句群¹⁾」の概念

を取り入れた。つまり文章学研究は「句群」にまで拡大したのである²⁾。

二. 筆者の主張点

日本語学会でも「文章論」という言葉が様々な意味に使われている。大別すると、文体論的な意味の文章論、そして文法論の一領域として語論・文論と並ぶ意味の文章論になる。文法論の一領域としての文章論とは、周知のごとく、時枝誠記が『日本文法 口語篇』(1950年 岩波書店)及び『日本文法 文語篇』(1954年 岩波書店)において提唱したのであるが、それが永野賢氏によって継承され、『学校文法・文章論』(1959年 朝倉書店)、『文法論詳説』(1972年 朝倉書店)を経て、1986年の『文章論総説』(朝倉書店)において文法論的文章論という独自の理論として完成を見たものである³⁾。

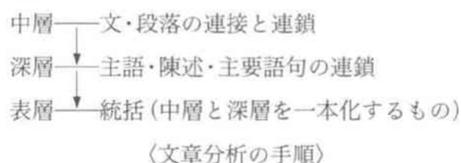
筆者は永野賢氏に師事し、大学院の6年間を加算すると11年の間、日本語の文章論を研究してきたが、氏の学説から実に大きな感化を受け、ついには中国語における文法論的文章論という新しい学説を打ち立てよう、との志を抱いた。勿論、日本語は膠着語であるのに対し中国語は孤立語であるため、永野氏の学説をそのまま援用するわけにはいかない。筆者は永野氏の学説を十分に消化した上で、中国語に即した文法論的文章論の理論を打ち立てようと試みるものである。また、従来の中国語文章学の観点との相違点をまとめると次のようになる。

1. 文章論は文法論の一領域であり、以下の通り図示できる。



このため「文法論的文章論」という新しい名称を与えている。

2. 伝統的な文章論や張志公の辞章学とは異なり、文と文の単純な接続関係を研究の出発点としている上、主語と主語の連鎖・陳述の連鎖・主語と陳述の連鎖といった文同士の内部の連鎖関係まで究明する。
3. 「句群」(注①参照)だけに着眼している呉為章・田小琳の文論に関する学説と違い、文章論という観点から、以下の図で示すように、中層から深層、そして表層へとマクロ的に分析する研究方法を取る。それを図で示すと以下ようになる。



4. 中国語の文と文の接続関係について新たな分類を行う。従来の「複文の構造分類とほぼ同じである」という説とは異なるのである。

ここに1つだけ例を挙げてみよう。次の独立した2つの文を見ていただきたい。

- ①你看上去脸色很好，真不错。不过，我今天来有事求你。

(訳：お見受けしたところ顔色が良く、本当に結構なことです。ところで、私は今日あなたにお願いしたいことがあって来たのですが。)

- ②他去。不过，小王不去。

(訳：彼は行く。しかし、王君は行かない。)

どちらの文にも接続詞「不过」(でも・しかし)があり、従来の中国語の文と文の関係の分類に従えば文①と文②はいずれも「逆接」とされるが、筆者はこれに疑問を呈する。文①は「転換型」、文②は「反対型」とすべきであろう。なぜなら文①の「不过」の前の内容と後ろの話題は明らかに違っており、「不过」は話題転換の役目を果たしている。これに対し文②の「不过」の場合は、前文も後文も「去」(行く)ということについて述べており、「去」(行く)と「不去」(行かない)の間に用いられている「不过」は文①の「不过」と意味を全く異にしているのは言うまでもない。接続詞の形態から前後の文の関係を分析する既成の学説を打ち破り、筆者はこの類型の文を「反対型」と分類するものである。このようなケースは他にもある。

- 5 永野氏の学説は膠着語の日本語に適用するものである。本研究ではいろいろな用語と表記などに関しては一部同様であるが、日中両国語は根本的に違うため、具体的に表す意味も当然違ってくる。加えて筆者は「文——段落——文章」ではなく「文——節——段落——文章」と主張している点で、氏の説と大きく異なっている。ここでいう「節」とは勿論、従来の「節」と違う観点であり、詳細については本論文の三と五の部分参照されたい。
6. 今回の研究では、説明文における文と文、段落と段落の接続及び連鎖に重点を置いた。

三. 説明文における文と段落の接続

一般的な説明文は他の類型の文章と比べ、文相互の関係が比較的密接で、より論理的であるため、筆者は中国語の文法論的文章論という体系を模索するにあたり、まず説明文を手始めとする研究方法を採った。さて、次に挙げるごく簡単な説明文を見てみよう。これは筆者が漢詩の「起承転結」の法則に基づいて作った現代文である。

- ①我有一个妹妹。

(訳：私には妹が1人いる。)

②我妹妹在美国。

(訳：私の妹はアメリカにいる。)

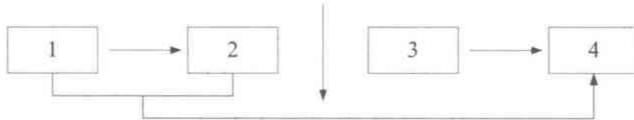
③小王是我的朋友。

(訳：王さんは私の友人である。)

④妹妹看上了小王。

(訳：妹は王さんのことを気に入っている。)

これは4つの現代文から成る文章である。各文の接続関係に着目すると、文②は文①の一步踏み込んだ説明であり、単純な展開である。また文③と文②の文意には直接的な関係はなく、話題を転換している。そして文④はといえば、「妹」に話題を戻し、しかも文③とも文意が直結している。このようにして文①から文④まで、各文の接続関係を図で表すと以下のようなになる。



上述の通り、隣接する2つの文は意味上どんなつながりがあるのか、と考えるのが「接続」の観点であり、この「接続」の観点で文脈展開の流れをたどることが文法論的文章論の枠組みの一つである。

1. 接続関係の類型

中国語の実情から鑑み、隣接する文の意味関係に基づいて以下のような類型に分類することができる。この分類方法は永野氏の説を参考に行っているが、具体的に表す意味は全く同じわけではなく、筆者が数多くの中国語の文章例を分析した上で総括したものである。この点でも従来の学説と見解を異にしている。

- A. 展開型——前文の内容を受けて、後文で展開した内容を示す。前文を踏まえてそれに関する新しい情報の提示、及び因果関係を表すようなものもこの類型に入る。

図式：



例文：

①四月一日开学。学生们昨天开始来学校上课。

(訳：4月1日に学校が始まった。学生たちは昨日から学校に来て授業に出ている。)

②她已经住了一个月的医院了。所以，大家都非常担心。

(訳：彼女が病院に入院して1ヵ月になる。だから、みんなとても心配している。)

B. 補充型——後文が前文の内容を補足説明する。

図式：



例文：

①我并不是不想去。那是因为那天我不舒服。

(訳：私は決して行きたくなかったわけではありません。あの日は体調が悪かったからです。)

②湿度大的地方常吃辣的。听说那样可以排出身体里的“湿”。

(訳：湿度が高いところではよく辛いものを食べる。そうすると体の中の水分を排出することができるそうだ。)

C. 並列型——前文の内容を踏まえて後文の内容を加え、同様にその情況について説明する。

図式：



例文：

①她去了。她父母也去了。

(訳：彼女は行った。彼女の両親も行った。)

②中国是我的第一故乡。日本是我的第二故乡。

(訳：中国は私の第一のふるさとで、日本は私の第二のふるさとだ。)

D. 同格型——後文が前文の内容と重複する。例示や解釈などがこの類型に入る。

図式：



例文：

①这两个要考虑的问题。一个是时间，一个是经费。

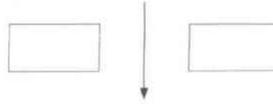
(訳：考慮しなければならない問題が2つある。1つは時間，もう1つは経費だ。)

②你要找他好好谈一次。也就是说，要面对面地交谈。

(訳：一度彼に会ってよく話すべきだ。つまり、差し向かいで話をする必要がある。)

E. 轉換型——前文の内容とほとんど関係がない。

図式：



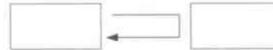
例文：

①你看上去脸色很好，真不错。不过，我今天来有事求你。

(訳：お見受けしたところ顔色が良く、本当に結構なことです。ところで、私は今日あなたにお願いしたいことがあって来たのですが。)

F. 反対型——後文と前文の内容が相反している。

図式：



例文：

①他昨天去了。但是，我们三个人都没去。

(訳：彼は昨日行った。しかし、僕たち3人は誰も行かなかった。)

②我来日本十年多了。可是，到今天我也吃不惯梅干。

(訳：私は日本に来て10年以上になる。だが、今でも梅干は食べつけない。)

G. 对比型——前後の文が選択や对比，对立といった関係になっている。

図式：



例文：

①我喝咖啡。你们呢？

(訳：私はコーヒーを飲みます。あなたたちは？)

②他的爱人又高又胖。我的爱人又矮又瘦。

(訳：彼の奥さんは背が高く太っている。僕の妻は背が低くやせている。)

H. 飛躍型——隣の文を乗り越えて，連接関係を持つ。

図式：



例文：

①风停了。②天晴了。③风带走了所有的不幸。

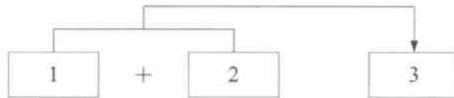
(訳：風が止んだ。空が晴れた。風はあらゆる不幸を運び去った。)

上の文章における各文の接続関係を具体的な図で示すと次のようになる。



I. 積躍型——2つ以上の文が組み合わさり、他の文と接続関係を持つ。

図式：



例文：

①大妹的名字叫双双。②小妹的名字是彤彤。③两个妹妹都在美国。

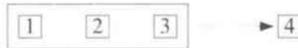
(訳：上の妹の名前は双双という。下の妹の名前は彤彤という。妹たちは2人もアメリカにいる。)

上文の具体的な図は以下の通りである。



J. 帰結型——いろいろ説明し、最後の文で結論的なものをまとめている。

図式：



例文：

①过年吃饺子；②接风吃面条；③过生日吃寿桃……。④这都说明了一个问题：中国人很讲究。

(訳：年越しには餃子を食べる。歓迎の席では麺を食べる。誕生日には桃饅頭を食べる。これは中国人が習慣を重んじる、という事実を物語っている)

この文章の各文の接続関係を具体的な図にして次に示した。



2. 接続関係の実際

続いて接続関係のパターンを実際の文章に応用し、各文のつながりに着目してみようと思う。中国語と日本語は文法の構成が根本的に異なっており、加えて本論文で探究するのは中国語の文章における文同士の接続関係であるので、ここでは文章例として原文が中国語であるもののみを挙げることにした。筆者はこれに直訳した日本語を添えたが、理解の

一助となれば幸いである。尚、文章中の各文に振られた番号は筆者が加えたものである。

文章例(1)

〈原文〉

中国人的姓

『新漢語教程Ⅲ』p. 70より

(北京大学出版社 1995年 李曉琪等著)

①中国人的姓有单姓和复姓之分。②单姓就是姓用一个汉字表示，如：张、王、李等，复姓就是姓用两个或两个以上的汉字表示，如：司马、诸葛等。③中国有五个大姓，所谓大姓，就是姓那五个姓的人特别多。④哪五个大姓呢？⑤有一句流传在民间的话说：“张、王、李、赵遍地流（刘）。”⑥非常形象地回答了这个问题。⑦中国到底有多少个姓呢？⑧很早以前，有一本关于姓氏的小学生启蒙读本，叫做《百家姓》。⑨《百家姓》里收了中国人的五百多个姓，但是实际上，中国人的姓有上千个。

〈日本語訳〉

中国人の姓

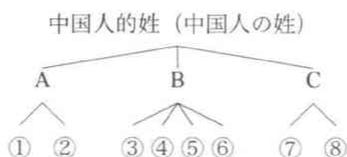
中国人の姓には単姓と複姓の別がある。単姓とは張・王・李などのように、姓が1文字の漢字で表記され、複姓とは司馬・諸葛などのように、姓が2文字もしくは2文字以上の漢字で表記される。中国には5つの大姓がある。いわゆる大姓とはその5つの姓を名字とする人がとても多いということだ。さて5つの大姓とは？「張・王・李・趙は至る所に流れている（「流」と「劉」は同音）」という言葉が民間に伝わっている。実にうまくこの問いに答えているのである。中国には一体いくつの姓があるのだろうか？かつて『百家姓』という、名字に関する小学生の入門読本があった。『百家姓』には中国人の500余りの姓が収められているが、実際には中国人の姓は1000にも及ぶ。

この文章の文の接続図を作ると、次のようになる。



この文の接続図から、文章全体の構成と話の要点をはっきりと見て取ることができる。具体的に述べると、この文章では「中国人の姓」というテーマを中心に「展開」的な説明が2回行われている。つまり3つの角度から説明がなされているのである。文③と⑦は文章の「展開」の「節」である。また、文②は文①に対して、文④・⑤・⑥はいずれも文③に対して、文⑧・⑨も文⑦に対して詳細な説明を加えている。こうすると文章の「中心語」

も一目瞭然で、Aのそれは「単姓と複姓」、Bは「五大姓」、そしてCは「500余りの姓」である。これを図で示してみよう。



文章例(2)

〈原文〉

中国人的忌讳(一)

『中国と日本』p. 50より

(朝日出版社 1992年 荒屋勸等著)

①中国人在过年过节,有红白喜事的时候,特别忌讳听到不吉利的话,遇见不吉利的事。②比如说,“完了”这个词就很不吉利,所以人们尽量不用。③过年的时候,饺子就是煮破了,也不能说“破了”,因为人们害怕这句话会引出“家破人亡”的后果,而应该说“挣了”。④“挣”还有挣钱的意思。⑤过年也不能打破东西。⑥万一东西破了,要赶快说“破财免灾”;⑦万一东西掉在地上碎了,要赶快说“岁岁平安”。

〈日本語訳〉

中国人のタブー

中国人は新年や祝日,慶弔の行事があるとき,不吉な言葉を耳にしたり,不吉な事に遭遇したりするのを非常に嫌う。例えば「終わった」という言葉はとても縁起が悪いため,人々はできるだけ使わないようにする。新年を祝うとき,餃子を煮てそれが破れても,やはり「破れた」と言ってはならない。なぜなら人々はこの言葉が「一家が離散し,身内が亡くなる」という災いを引き起こすと恐れているからで,「もがいた」と言わねばならない。このことばには「金を稼ぐ」という意味もあるからである。新年には物を壊してもいけない。もし物が壊れたら,急いで「財で損して災を免れた」と言わなくてはならない。もし物が床に落ちて砕けたら,急いで「来る年も来る年も平安だ」と言わなくてはならない。

この文章の文の接続図は以下の通りである。



この文の接続図によって,各文同士の関係が一目瞭然となり,また同時に作者の話の運び方も理解することができよう。図にある通り,冒頭の文はいわば文章の「傘」であり,

文②から文⑦は全て文①の傘の下で文①を具体的、かつ詳細に説明しているのである。また文②、文③及び文⑤は並列の関係にある。更に視覚的に捉え易くするため、次に文章の構造を図示した。



文章例(3)

〈原文〉

婚俗

(同上 p. 26より)

①城里人的婚礼现在比较简单, 而且有些西化了。②很多青年都喜欢去照像馆穿上西式婚礼服照张结婚像, 留作纪念。③结婚那天, 一般人在家里或者在饭馆摆几桌酒席, 招待亲友。④有些旧风俗在城市里很少能见到了。⑤不过新房的布置到还保留了一些老习惯。⑥比如, 在门、窗户、墙上贴上用红纸剪成的各种剪纸和双喜字;⑦在被子里放上花生、红枣、栗子等喜果。⑧放花生是希望多生几个孩子, 而且要有男有女;⑨枣儿、栗子是跟“早立子”的发音一样, 有祝愿新郎、新娘“早得贵子”的含意。

〈日本語訳〉

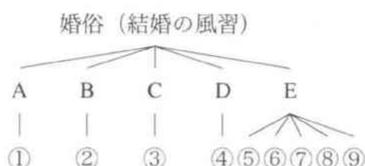
結婚の風習

近ごろ, 都会の人の結婚式は割と簡略になり, なおかついくらか西洋化した。多くの若者が写真館へ行き, 洋風の結婚衣裳を着て結婚写真を撮り, 記念とすることを好む。結婚の日, 大抵の人は自宅かレストランでテーブルを数卓並べ, 親戚や友人をもてなす。一部の古い風俗は都会ではあまり見られなくなった。けれども新居の飾り付けにはまだ古い習慣が残っている。例えばドアや窓, 壁に, 赤い紙を切って作った, さまざまな切り紙細工や「喜」の字を二つ並べた字を張るのだ。また布団の中に落花生や干しナツメ, 栗などのめでたい果実をまく。落花生をまくのは多くの子供, それも男の子と女の子に恵まれるよう願ってのことである。ナツメと栗は「早く子供ができる」の意の“早立子”と発音が同じであり, 新郎・新婦が「早く子宝に恵まれるように」という願いが込められている。

この文章の各文の接続関係を図にまとめてみよう。



この文の接続図によれば、文①から文④はいずれも「展開」であり、文⑤が文④とは逆の事柄に言及し、また文⑥・⑦・⑧・⑨は文⑤に詳細な説明を加え補足していることが分かる。この文章は3つの発展の「節」と1つの転換の「節」という4つの「節」から成り立っているのである。この文章の構成図を以下に示した。



ここまで1段落のみの文章での文同士の接続関係を分析してきたが、この方法は段落と段落の関係にも応用可能である。その際、段落の要点を要約文としてまとめ、その要約文と要約文の関係から段落間の関係を把握するとより理解し易い。段落の持つ意味を捉えて要約文にまとめるにあたり、重要な立脚点となるのが段落内の文の接続関係である。人は文章を読み解くとき、潜在意識の中で文と文の接続関係を模索している。したがって接続図にまとめ上げる作業とは、言わば深層に隠された潜在意識を表出させるだけのことなのである。

次に挙げる複数の自然段落から成る文章を例に、各段落の接続関係を探究してみよう。

文章例(4)

〈原文〉

中国人与茶

『最新中国語教本(下)』 p. 72より
(中華書店 1994年版 劉山等著)

(一) 喝茶是中国人的生活习惯，也是招待客人的一种方式。你到中国人的家里去作客，主人总是先给你沏一杯茶，再给你端来糖果或者点心，一边请你喝茶，吃点心，一边陪着你谈话。这时候，客人和主人之间，就产生了一种亲切的、接近的气氛。

(二) 中国人喝茶的历史很久了。茶树生长在南方。江南人喝茶的历史从汉代就开始了。然后，从南方传到北方。后来，茶叶成了人们日常生活中不可缺少的东西。过去，有一句俗话：开门七件事，柴、米、油、盐、醋、茶。就是说，这七样东西是人们的生活离不开的。

(三) 一千二百多年以前，唐代有个人叫陆羽，他写了一部书叫《茶经》，这是世界上第一部关于茶的专著。这说明唐代茶叶的生产已经相当发达。

(四) 由于茶的品种不同, 制作方法不同, 通常把茶分成三种: 绿茶、红茶和花茶。三种茶的味道不同: 绿茶清淡, 红茶味浓, 花茶有一种香味儿。一般地说, 北方人喜欢喝花茶, 南方人喜欢喝绿茶。现代医学研究的结果证实, 喝茶不但对健康有益, 而且有的茶可以减肥。

〈日本語訳〉

中国人と茶

喫茶は中国人の生活習慣であり, 客をもてなすマナーでもある。あなたが客として中国人の家へ行ったら, 大抵の場合, 主人はまずあなたにお茶を一杯入れてくれる。それから砂糖菓子か点心を出し, あなたにお茶や点心を勧めながら, 話の相手をするだろう。そのとき, 客と主人の間には, 親密な雰囲気が生まれる。

中国人の喫茶の歴史は長い。茶の木は南方に生える。江南人の喫茶の歴史は漢代より既に始まっている。その後, 南方から北方へと伝わった。やがて, 茶は人々の日常生活に不可欠の物となった。昔, 「暮らしを立てていくのに必要な7つの物, まき・米・油・塩・味噌・酢・茶」ということわざがあった。つまりこの7種の品物が人々の生活になくってはならなかった, ということである。

1200年以上前, 唐代の陸羽という人がいて, 『茶経』という本を書いたが, これは世界初の茶に関する専門書である。これは唐代には既に茶の葉の生産がかなり発達していたことを物語っている。

茶の品種の違いによって製造方法は異なり, 通常, 茶を, 緑茶, 紅茶そして花茶の3種に分類する。3種の茶の味は違っており, 緑茶は淡白で, 紅茶は濃厚, 花茶は香り高い。一般的に言えば, 北方の人は花茶を好み, 南方の人は緑茶を好む。現代医学の研究の結果, 喫茶が健康に良いだけでなく, 茶によっては体重を減らすことができると証明されている。

まず各段落ごとに要約文を作ってみると, 次のようになる。因みに前述した通り, 要約文は段落を構成する全ての文の接続関係を見た上で文の接続図を作るという作業を経て導き出すのであるが, ここではその手順を省略する。

〔文章例(4)の各段落の要約文〕

- (一) 喝茶是中国人民的生活习惯, 也是招待客人的一种方式。
(喫茶は中国人の生活習慣であり, 客をもてなすマナーでもある。)
- (二) 中国人喝茶的历史悠久, 从南方传到北方, 茶叶成为生活必需品。
(中国人の喫茶の歴史は古く, 南方から北方に伝わり, 茶は生活必需品となった。)
- (三) 唐代茶叶的生产已经相当发达。
(唐代には既に茶の葉の生産がかなり発達していた。)
- (四) 茶分为三种, 味道不同。喝茶益于健康, 可以减肥。

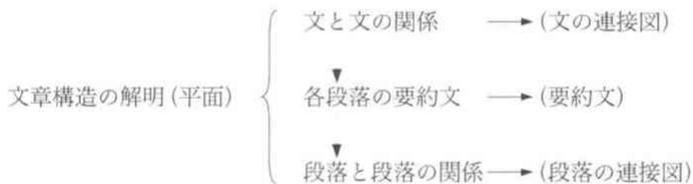
(茶は3種に分類され、味が違う。喫茶は健康に良く、体重を減らすことができる。) 以上の要約文を踏まえて段落の接続関係を図にしてみよう。



勿論、接続関係の種類を具体的な文章に応用する際、人によって判断は若干異なるであろうし、多少の食い違いが生ずるはずである。前述した通り、接続論の目的は文脈展開の流れをたどることにあり、接続種類の判断は読み手個々人の脈絡に頼らざるを得ない。そこで多数派の意見を取り上げて最大の客観性の裏付けとするのが肝要となってくるのである。ごく一部に解釈の相違があるという理由で、接続関係の意味を疑っている文章論など成り立たない。言語表現に言及する以上、100%の正答はあり得ず、具体性を根拠として論ずるより手はないのである。

四. 説明文における文と段落の連鎖

文同士の相互関係については先に図を用いて論述したが、文の接続関係に着目しているだけでは、文章全体の構成を把握することはできない。そこでこれを踏まえて段落間の接続関係を更に追究し、全体の構成を捉えていくことにしよう。以下の図に示すように、文章の構造を分析するにあたり、具象から大略へ、小から大へ、そして最後に全体へ至る、といった不可欠なプロセスである。



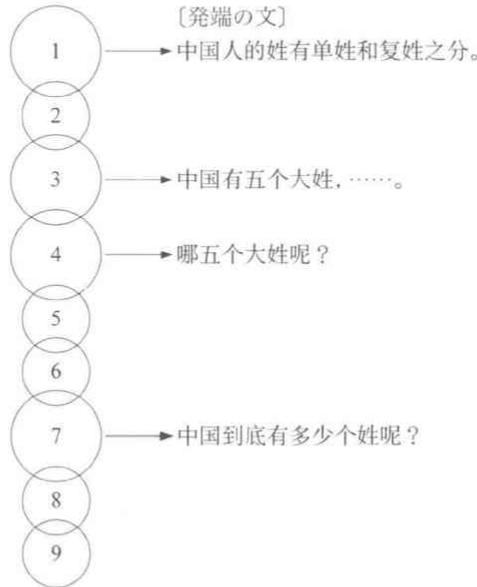
しかしこれでは「平面」的な角度から分析しているに過ぎず、立体感に欠ける。文章の統一原理を究明しようにも、文の接続関係では文脈の展開をたどるのみになってしまう。ゆえに今一つ別の観点を考慮する必要が生じて来るのであるが、ここで永野氏の論じておられる「連鎖」が鍵となる。

1. 文の連鎖関係

永野氏は日本語の文の連鎖について、「文の連鎖というのは、文の連続における一つ一つの文を鎖の輪に見立てて、文が鎖状に連なることによって文章が成り立つ、とする見方である。さらに重要なことは、ここで連鎖というのは、“鎖のようにつながっているもの”と

してでなく、“鎖のようにつながっていくもの”として見るということである。」(『文章論総説』朝倉書店 1986年 永野賢著 p. 144より)と説明しておられる。中国語の文章もまた同様であり、その具体例として、先に挙げた文章例(1)を見ていただきたい (p. 10の原文を参照のこと)。

文①②はどちらも中国人の姓の分類について述べており、文③では「五大姓」という新しい情報を提供し、文④⑤⑥は「五大姓」にまつわる説明、文⑦ではこれらを前置きとして更に「姓の総数」の問題を提起している。文章全体が1つの中心、即ちタイトルである「中国人の姓」をめぐっての説明となっているのである。この文章は1つの「中心」と3つの「節」から構成されているが、この「節」とは「発端の文」のことである。次に文章例(1)の文の連鎖を図示してみた。尚、「発端の文」といくつかの文の連鎖をまとめていく役割を果たす文は大きな輪で表している。



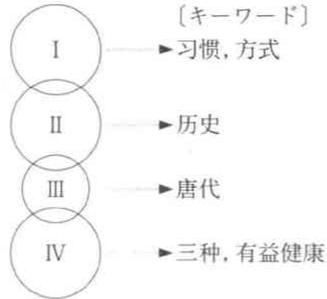
(文章例(1)の文の連鎖図)

つまり、文の接続図は隣り合う文と文の関係、文の連鎖図は各文が文章全体で果たす役割を図解しており、この両者より文章の立体構造を捉えようというわけである。

2. 段落の連鎖関係

続いて段落の角度から文章の立体構成を分析してみよう。文章例(4)は4つの自然段落から成り立っており、上述した文の連鎖図の方法に基づけば、先にまとめた要約文と段落連

接図から簡単にその段落の連鎖を書けるであろう。尚、ここでは段落の通し番号はローマ数字で表記する。



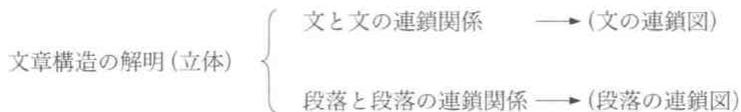
(文章例(4)の段落の連鎖図)

キーワードとは、各段落の代表単語である。では、それぞれの段落の陳述部分は何であろうか。それは以下のようになる。



中国語の陳述の連鎖については、拙稿「文法論的文章論に基づく中国語の文章の構造分析試論」(昭和女子大学大学院「日本文学紀要」Vol. 4 H5.3発行)を参照されたい。「陳述の連鎖」に関する研究は次の機会ですぐに詳しく論述することになる。

以上の「文の連鎖図」と「段落の連鎖図」の分析に立脚し、立体的な角度から文章全体の構成を俯瞰すると、次の図のように整理することができよう。

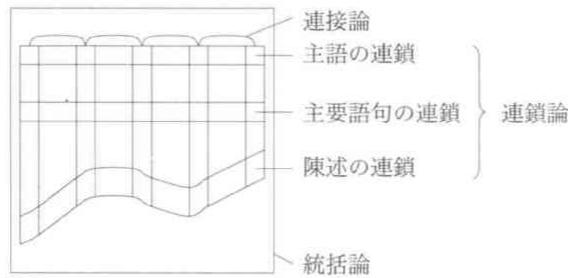


五. まとめ

1. 文章における文と文及び段落と段落の接続、そして連鎖関係の分析によって、以下の図のように「平面」「立体」という2つの角度から文章構造を解明することができる。



「平面」と「立体」の角度から文章の脈絡と構造を一先ず把握することができたが、更にもう一步踏み込んで、「統括」の観点から文章をトータルに捉える必要がある。この作業が次回に論述する「統括論」である。加えて、文中の主語と主語の関係、陳述と陳述の連鎖関係、そして主語と陳述の連鎖関係についてもっと詳細に追究せねばならない。それこそ中国語の文法論的文章論という体系を完成させる最終目標なのである。この学問の体系を以下に図示してみた。



図③ 〈文章構造解明の構想図〉

長年平行線をたどっていた、複文と単文、主語と述語といった一連の文法問題は、この新研究法によって解決の糸口を見出すことができるだろう。というのも、この方法はまず始めに文章構造の分析から行うのであり、言い換えれば、文法現象を抽象的かつ一面的に考えるのではなく、実際の文章において表層から深層、そして全体へ、というマクロとミクロ、具象と抽象が融合した全面的な分析方法で考えているからである。

- 筆者の見解では、「語」と「段落」の間に「節」という観点を挿入すべきであると考えられる。この「節」とは文字通り「節目」の「節」、つまり段落の中での「発端の文」を指し、「節」によって新しい展開が示されるのである。例えば文章例(1)の文①や文③、文⑦が「節」で、「節」の中には当然「支節」も存在し、文⑥と文⑨がこれに該当する。説明文中で「節」の役割を担っている文のほとんどは「発展型」であるが、この考え方は従来の「句群」(注①参照)の考えと異なる。「句群」が「意味上の文の集まり」を重要視するのに対し、「節」の着眼点は「意味上の変わり目」で、これもまた今回の研究において筆者が主張したい点である。

筆者は、今後この研究を更に深め、中国語文法論的文章論の理論を完成させるべく一層の努力をしていく所存である。

注

- 1) 1つまたは2つ以上の文によって1つのまとまりの意味を表す文の集まりのことを指す。
- 2) 伝統的な文法研究では文を最大の単位としていたが、近年、学者たちは「句群」を重視しており、文法学の研究範囲は「句群」にまで拡大しているのが現状である。
- 3) 拙稿「文法論的文章論に基づく中国語の文章の構造分析試論」(昭和女子大学大学院「日本文学紀要」Vol. 4 H5.3発行)

[附記]

本稿を執筆するにあたり、貴重なお意見をいただいた恩師である永野賢先生に心からお礼を申し上げます。非常に悲しいことですが、先日、永野先生が永眠されました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。